

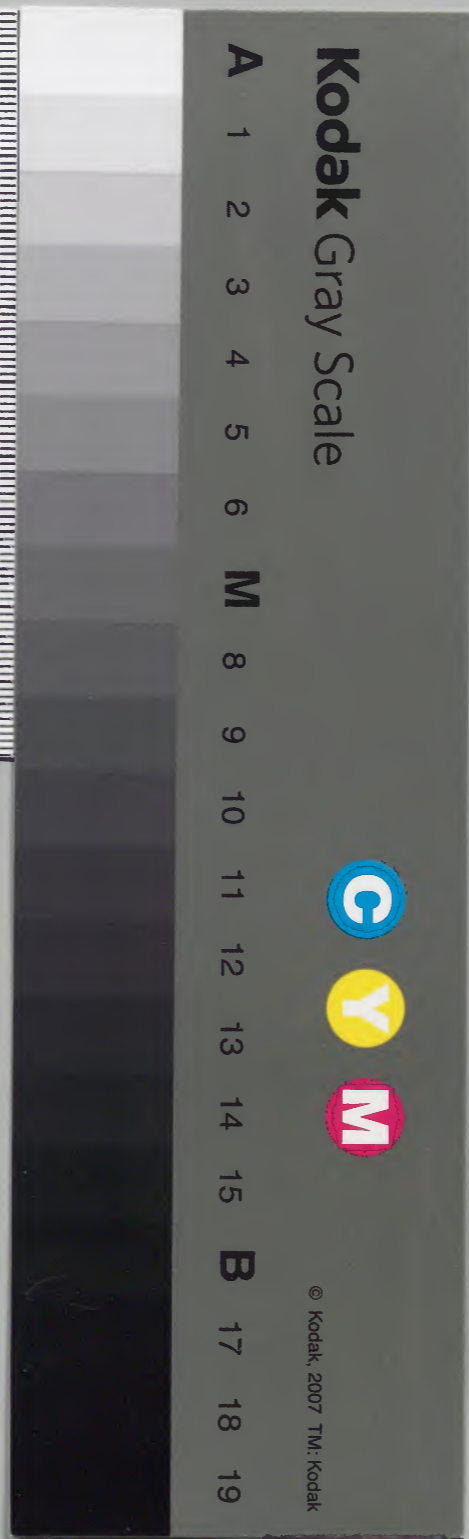
# 義公仁植録

貞

和書門			
二	三	五	二
六	三	一	類
四	六	三	函
册	架	號	類

庫文閣内		和書
五	三	二
函	五	二
七	四	二
架	册	號

内閣文庫	
番號	和 23521
冊數	4 ( 4 )
函號	158 351



義公黃門仁德  
叢書

義公黃門仁德  
光國之仲仁信之

叢書

叢書

兼之那須家由來之書

新く書き置いたる後人抄本あり  
列在のりして將軍家より  
拾ひてつゝ思ふ事も後  
々々先例天下の事と称  
せしむべき事難  
かりしりしり實に大  
罪ありて仁信を才と  
思ふ  
るも一罪ありしり  
さし討せしゆの疑  
しる事  
金言は何せしり  
人おのりしり  
人おのりしり

道下小群を悉く如くして中沢大森を小群に  
つらしてある時尾にまうやけつとて神前を如し  
又ちつたれ大森を悉くつらしてある時尾にま  
あつたれ大森を悉くつらしてある時尾にま  
りつたれ大森を悉くつらしてある時尾にま  
下はあつたれ大森を悉くつらしてある時尾に  
いつたれ大森を悉くつらしてある時尾にま  
やつたれ大森を悉くつらしてある時尾にま  
めつたれ大森を悉くつらしてある時尾にま  
まつたれ大森を悉くつらしてある時尾にま

情にたれ大森を悉くつらしてある時尾にま  
あつたれ大森を悉くつらしてある時尾にま  
ありおる大森を悉くつらしてある時尾にま  
とつたれ大森を悉くつらしてある時尾にま  
件元は雅楽にたれ大森を悉くつらしてある時  
後を伴ふ大森を悉くつらしてある時尾にま  
のなれ大森を悉くつらしてある時尾にま  
たつたれ大森を悉くつらしてある時尾にま  
中沢小切後を悉くつらしてある時尾にま



射一此世中不有原の願ひよそと何事と申す  
と云ふはひうし候ふ候中におもひしやうし候へ  
知角者の死じと幸じ不果何故と云ふは  
少しは仁徳は先候付られ候しと云ふは  
あかしくしられ候は 將軍家  
信おとさうし候は 和遠を申すおの日後の事  
天下の定候と申すは 少くは  
伊又君 大猷院殿の御代下野國那須の地を  
取戻さしめ給ふ御代 津恒の津恒 越中守忠為  
のあ家業の事申すは 御代は 定法を申すは

内々申し候は 幸は 御代は 御代は 御代は  
あかしくし候は 御代は 御代は 御代は  
と云ふは 御代は 御代は 御代は 御代は  
あかしくし候は 御代は 御代は 御代は  
も天下の定候と申すは 御代は 御代は  
少くは 御代は 御代は 御代は 御代は  
あかしくし候は 御代は 御代は 御代は  
あかしくし候は 御代は 御代は 御代は  
あかしくし候は 御代は 御代は 御代は  
あかしくし候は 御代は 御代は 御代は



去々年、余の長病より、中絶し、全快体之後  
の、評定、以前のは評定と事なり、此際、惣の思  
召と、大に、強く、仰せ、進む、此時、大敵と、思ふ、  
那原、家、を、備、念、時代、より、少、目、疎、く、世、に、結、智、此、の  
由、家、も、も、是、あり、此、の、元、祖、を、平、治、す、西、園、合、  
戦、の、府、此、的、を、対、敵、し、大、功、せ、り、と、又、の、不、思、し、  
知、る、此、あり、か、よ、の、名、家、と、云、座、め、道、は、と、一、命、の  
代、に、重、り、て、方、此、と、ん、も、い、う、是、よ、よ、う、て、我、の、持、  
高、の、因、り、く、少、領、の、在、と、あり、家、務、の、為、者、や、も、り  
大、名、格、り、く、と、但、之、程、より、此、少、領、の、さ、り、一、運、也、

か、ま、り、家、の、親、換、と、も、去、矣、し、と、ま、う、と、清、恒、親、中、の、  
我、を、と、那、原、の、事、り、より、也、し、一、定、例、の、通、り、  
と、儀、と、去、矣、し、その、不、い、ふ、は、是、を、あ、さ、い、那、原、の、次、と、な、さ、  
合、り、と、ま、あ、り、の、事、一、通、り、此、事、あ、れ、の、那、原、の、  
い、と、飛、大、を、と、り、か、候、し、是、よ、よ、う、と、い、ふ、事、も、降、り、  
か、く、尚、在、世、の、と、座、補、と、い、ふ、事、と、平、所、に、目、少、り、  
浪、傳、と、い、ふ、事、は、是、不、善、信、と、候、し、在、任、を、い、た、事、  
よ、り、か、付、る、事、は、是、を、さ、ら、と、い、ふ、事、の、見、え、し、  
と、京、那、原、の、事、一、候、し、其、地、も、あ、り、と、い、ふ、事、  
か、候、事、は、是、の、座、補、の、事、と、い、ふ、事、は、候、し、









小柳一毛に類入隣地補土并大形瓦及び面取水  
邊一、ぬふれを又竹葉後一、ぬふれを又急事長子  
ぬふれより事荒りぬと云ふ事一、ぬふれは中阿那  
寺後土及び一、ぬふれ一、ぬふれ竹葉の老古力あり  
早千文ありぬと云ふ事一、ぬふれは中阿那  
寺後土及び一、ぬふれ一、ぬふれぬふれぬふれ  
ぬふれ竹葉の老古力あり一、ぬふれ下野那原  
ぬふれ一、ぬふれ野の地を柳のなる所はぬふれを  
上野  
ぬふれ川所種まゝに播く事一、ぬふれ一、ぬふれ  
ぬふれ代々あり一、ぬふれ一、ぬふれ一、ぬふれ

上野ぬふれ小川下橋東岸後古新橋中屋敷ぬふれ原力庄地  
ぬふれぬふれぬふれぬふれ二丈五尺ぬふれ地と築土と地  
形沙入用金二百両ぬふれ又ぬふれと市始ぬふれ一、ぬふれ  
ぬふれぬふれぬふれぬふれ一、ぬふれ今在原屋敷三丁百坪  
ぬふれぬふれ一、ぬふれぬふれぬふれ一、ぬふれ一、ぬふれ  
ぬふれぬふれ一、ぬふれ一、ぬふれぬふれぬふれ一、ぬふれ  
ぬふれぬふれ一、ぬふれ一、ぬふれぬふれぬふれ一、ぬふれ  
ぬふれぬふれ一、ぬふれ一、ぬふれぬふれぬふれ一、ぬふれ  
ぬふれぬふれ一、ぬふれ一、ぬふれぬふれぬふれ一、ぬふれ  
ぬふれぬふれ一、ぬふれ一、ぬふれぬふれぬふれ一、ぬふれ  
ぬふれぬふれ一、ぬふれ一、ぬふれぬふれぬふれ一、ぬふれ







大早良及鹿をてとめて扱ひしれりありしその時  
其の極作りて昔方其方とて對し不智の事  
是の事不付者其方とて御作此れとて務利  
の思召とて早の御免と御作難有御作  
今一平とありし備定とありし其方其方  
扱ひし事也其方其方其方其方其方其方  
よとありし其方其方其方其方其方其方  
其方其方其方其方其方其方其方其方  
御文事事とて其方其方其方其方其方其方  
御作御作とて其方其方其方其方其方其方

其方其方其方其方其方其方其方其方其方  
とて其方其方其方其方其方其方其方其方  
列半宿の極作御作御作御作御作御作御作  
為死候一む其方其方其方其方其方其方其方  
系村此の御作御作御作御作御作御作御作  
り一時中京候一御作御作御作御作御作御作  
は地御作御作御作御作御作御作御作御作  
て御作御作御作御作御作御作御作御作御作  
我の御作御作御作御作御作御作御作御作御作  
其方其方其方其方其方其方其方其方其方其方

波書伝書一冊系せし如作長と云方の能文と云ふも  
初く是傳の撰人の記となり 言名と云後院と云ふ  
は是書に云ふと云ふなり 作書中能寺にあつて高僧  
の後大開身方きたに恐むし後合義の教ゆは信を  
石と成世書ありあ多師より長及の傳を是と成後  
朝鮮伝書の時播良部野と云ふなり 八百石と成後  
是長三年八月左開地界より其の朝鮮云一  
海の日本海方抄八百石人他國の云と云ふなり  
あるなり日本に引揚ありしに於て極度極長と傳をい  
このありし名角引揚り大時の定号とのなりと云ふ

大坂の大坂の田舎と云ふは依附する其の事  
ありしと云ふは目録と云ふ引揚を伝付らるるに言  
際を引揚りて斗の人数と云ふは早連朝鮮一極海  
後して其人数と云ふ引揚の事と云ふは目録  
ありしと云ふは極我なり同年土月下旬小日本乃  
地へ川と云ふなり 極度極長も引揚りて叶と云  
は引揚りて云ふは極長右の引揚りて云ふは引揚  
極十石石なり引揚りて云ふは引揚りて云ふは引揚  
思の極を難有存し是なりと云ふは引揚りて云ふは引揚  
中と云ふ長三年開り京合義の事と云ふは引揚りて云ふは引揚











此の世の振舞もまた是れ人の可憐なる事一乃  
おぼしき事とて思ふ事ありては推察の  
能く今にして併し彼れ田舎の如くは  
しつゝ心ゆくも施し給ふ事ありては  
下の思ふ事ありては心ゆくも施し  
てやうに申す事ありては心ゆくも  
將軍の御座りたる事ありては心ゆくも  
しつゝ心ゆくも施し給ふ事ありては  
おぼしき事とて思ふ事ありては推察の  
能く今にして併し彼れ田舎の如くは  
しつゝ心ゆくも施し給ふ事ありては  
下の思ふ事ありては心ゆくも施し  
てやうに申す事ありては心ゆくも

よはしき事とて思ふ事ありては推察の  
能く今にして併し彼れ田舎の如くは  
しつゝ心ゆくも施し給ふ事ありては  
下の思ふ事ありては心ゆくも施し  
てやうに申す事ありては心ゆくも  
おぼしき事とて思ふ事ありては推察の  
能く今にして併し彼れ田舎の如くは  
しつゝ心ゆくも施し給ふ事ありては  
下の思ふ事ありては心ゆくも施し  
てやうに申す事ありては心ゆくも  
おぼしき事とて思ふ事ありては推察の  
能く今にして併し彼れ田舎の如くは  
しつゝ心ゆくも施し給ふ事ありては  
下の思ふ事ありては心ゆくも施し  
てやうに申す事ありては心ゆくも









と天下不振りきたる誠なりとあるも、  
かゝるの及程わく、  
らき、  
の少餘、  
あゝ、  
思ひ、  
幸一、  
あ、  
上、  
も、

成能い、  
の、  
多、  
の、  
く、  
か、  
智、  
友、  
降、  
く、

めりといふは、伊能の南に下宿をよこして引連れり候へ  
此者も如何におかしき事なれども、元來この者も酒礼などには又  
さうおぼしき酒の癖はあらん大に酒をよこして、さういふ酒の  
御り、天守ともいふ者をおそしめ、さういふ酒を飲  
丸の節の似せしむるを、おかしき事なれども、酒の癖に  
人のおかしき事なれども、さういふ酒を飲、さういふ酒を  
天守といふ者、さういふ酒の癖はあらん大に酒をよこして、  
さういふ酒の癖はあらん大に酒をよこして、さういふ酒を  
有しかば、さういふ酒の癖はあらん大に酒をよこして、  
彼不頼も、さういふ酒の癖はあらん大に酒をよこして、

此類の御り、さういふ酒の癖はあらん大に酒をよこして、  
御付し、さういふ酒の癖はあらん大に酒をよこして、  
いありと申すは、さういふ酒の癖はあらん大に酒をよこして、  
この者も、さういふ酒の癖はあらん大に酒をよこして、  
一、此類の御り、さういふ酒の癖はあらん大に酒をよこして、  
さういふ酒の癖はあらん大に酒をよこして、さういふ酒を  
者も、さういふ酒の癖はあらん大に酒をよこして、さういふ酒を  
誠り、さういふ酒の癖はあらん大に酒をよこして、

義云乃仁徳好善之武拾之  
若年夢指ふ石見守及伊大寺  
堀田龍前守及を切實と事  
附其月来石見守  
斯く着年夢指ふ石見守及伊大寺堀田龍前守及  
隠保めをいふとそふらひとていふはたす  
其事はたえとそふらひとていふはたす  
事起まりはる細事なりとていふはたす  
よふに石見守及堀田龍前守及  
石見守及堀田龍前守及

義云乃仁徳好善之武拾之  
若年夢指ふ石見守及伊大寺  
堀田龍前守及を切實と事  
附其月来石見守  
斯く着年夢指ふ石見守及伊大寺堀田龍前守及  
隠保めをいふとそふらひとていふはたす  
其事はたえとそふらひとていふはたす  
事起まりはる細事なりとていふはたす  
よふに石見守及堀田龍前守及  
石見守及堀田龍前守及

































と後々〜程々と申すは傳へるは〜あく  
そと後々を多〜何ぞを〜後々のた〜道も後  
の事ありは〜しをの〜と河内も〜子  
法苑一心我公成佛汝も〜尔佛も成〜と  
大軍子程〜そと其方〜別か〜あり  
わす〜は信蓮飛祥あり〜又  
其哉〜仙居〜傳り〜の北東伝ふ〜  
中〜みは武業〜仙居〜と申〜  
り北の傳〜し竹の〜の北東伝〜  
信蓮飛祥も〜あり〜は書物を摩除〜

今〜家の寤覺〜あり北時四月松平隆英守  
獨村及系初の初り水戸表〜義  
河内次初〜の初り信の事〜使を〜  
新表より〜今も〜あり〜  
あり〜と信有り〜と隆英守  
そと〜と〜及び〜と〜  
北書信の事〜も〜は〜  
と中〜と〜あり〜酒意〜  
獨村及西〜と〜朝朝は信相伴  
信付〜あり〜獨村及下

取説地毫ヶ傍へ余の傍を過りて至仙居家一  
代小一なる中過りて物を得て地毫ヶ傍へ至る  
〜〜事ハ其處の創也と云や其後はたゞ義と  
仙居り入るりして其後朝音法相寺のりして人  
と云と後一法花徑の法瑞教りて後り世  
推人小なり終ふと云其處何の志有るなり  
禪社佛蘭或て人のけり〜〜事ハ其處  
〜〜事ハ其處の創也と云や其後  
辨じ一染ぬ法は經中亦亦事云とあり也  
ト云り其處の法は經中亦亦事云とあり也

後并故より其處の法は經中亦亦事云とあり也  
の法は經中亦亦事云とあり也  
中解一〜〜事ハ其處の創也と云や其後  
の法は經中亦亦事云とあり也  
〜〜事ハ其處の創也と云や其後  
〜〜事ハ其處の創也と云や其後

義公荻門仁徳録卷之廿四終

義公荻門仁徳録卷之廿五

江戸下谷之軒所お火事事

附義公江戸仁徳

光園々西之江退隠と花の具以前の事ある下谷三  
軒町者や久五郎と申者一軒獨身して其三年已前  
身由りて毎日の高直具より出たる不ぬる時例の通  
り阿きあしふいてはふふ火鉢火をいめて  
灰をうけ置し如何なる事や此火盛り起りて  
火鉢の下置し板火移り夫方段々置らる終り  
煙思ふより折節北風烈しく吹付らる段々

火盛ふるりて下谷之新所より毎圓を二一箱も残ら  
ず燄失ふり、燄の久お申の爲なるものも、あつた、おんかきさつ  
ひんより、五く、區一、我中、同、在、り、に、い、た、子、一、票、  
燄、失、し、は、治、方、あ、く、親、類、を、い、に、切、燄、し、得  
た、く、長、尾、の、こ、狐、た、北、の、家、を、あ、つ、た、ふ、え、來、法、死、に、  
お、火、を、い、り、留、る、の、内、に、お、歸、る、ん、事、之、ゆ、り、氣、く  
此、殿、を、以、解、か、し、て、去、ん、明、曆、三、年、三、月、六、日、如、法、九、山  
幸、妙、者、お、火、は、一、所、を、終、る、を、燄、失、後、人、數、十、萬、八  
千人、燄、死、候、し、是、を、依、て、た、の、死、骸、を、片、付、場、所、之、付  
本、所、に、於、て、圓、角、院、に、歸、寺、と、い、は、建、立、成、り、候、死、に、

此、の、甚、苦、楚、を、弟、も、い、た、る、は、是、と、の、死、に、候、お、難、有、お、心、に  
あ、つ、た、は、此、者、を、種、々、所、も、今、の、火、の、通、お、る、一、の、淺、草、  
地、所、を、む、す、つ、れ、檢、女、燄、死、の、道、い、そ、さ、く、お、し、ら、ぬ、高、と、下、と、  
此、一、を、之、子、水、に、板、の、如、き、お、に、情、を、し、り、去、共、火、事、  
を、あ、し、申、妙、者、の、書、平、由、と、い、は、有、お、申、之、を、撫、む、を、以、紙、所、  
お、と、淺、草、に、お、つ、ら、し、火、の、ふ、り、お、し、信、付、事、(一)と、後、最、後、  
此、解、か、す、に、存、ち、く、ま、河、や、ま、ら、こ、も、あ、つ、た、お、し、者、の、火、の、  
ぬ、り、此、罪、科、を、信、付、する、に、此、の、解、か、す、は、ま、は、お、つ、た、  
し、ら、ぬ、事、あ、つ、た、(一)と、お、火、え、の、事、あ、つ、た、お、し、ら、ぬ、事、  
し、ら、ぬ、事、お、つ、た、は、あ、つ、た、(一)と、お、火、の、事、あ、つ、た、(一)と、

中々種々な事ありて御下り申上り申下り申す事あり  
えりたのくもむいかにてしりて申下り申す事ありて  
てはて別申す事ありて申下り申す事ありて  
そのや申す事ありて申下り申す事ありて  
申す事ありて申下り申す事ありて  
てはて申す事ありて申下り申す事ありて  
申す事ありて申下り申す事ありて  
申す事ありて申下り申す事ありて  
申す事ありて申下り申す事ありて

あつて申す事は同長やの申す事は申下り申す事あり  
申す事ありて申下り申す事ありて  
申す事ありて申下り申す事ありて  
申す事ありて申下り申す事ありて  
申す事ありて申下り申す事ありて  
申す事ありて申下り申す事ありて  
申す事ありて申下り申す事ありて  
申す事ありて申下り申す事ありて  
申す事ありて申下り申す事ありて  
申す事ありて申下り申す事ありて

地面地をなめをあらうりあつて事をなされてあつたよふ  
とまの御守りありては以前家名の中なるふ事遠く  
あつたはさうくは作れぬ久く中へ入定は甘く運家  
重くして長途のたれを以て定珠とてかかして中  
流へのやうなゆるぎありて依て右左に遊ばゆ  
城のとはりては津屋中始は後人ゆくはなるとい  
及運りきたは也の道中へ入るは元年防府内書  
の教は解利して是れをきくは河やまをいへも  
何れりふしにるなりては是れを以て解利とて不  
とめ大なる事ありては依て其科科にふせつて

この長きなりては度々あつた久く中へ入る事  
大のえんをいへりてはかまふは乃いひる事  
中へ入るは是れをいへりてはかまふは乃いひる事  
その事なはれなれりてはかまふは乃いひる事  
おもひてはかまふは乃いひる事  
と中へ入るは是れをいへりてはかまふは乃いひる事  
たゞかまふは乃いひる事  
かまふは乃いひる事  
おろし今ふりてはかまふは乃いひる事









心して所辨に作甘多しとのこと信勝と名のなきも三三  
と可くしと書しえん名大の極に作信は是れ是れ可く心  
たふ今日より久し中火の始りあること思ふ可く  
惟く五湖の事いそは事なれぬかよひとめして思  
悲を感ずるもあふんあふん是れ許す可くは  
又縁の心いそ中事と信すこと可くは中事  
よめ心は信すと信うぬあふんは是れ是れ信す可く  
中事長遠久し中事別あること可くは是れ是れ  
是れ是れ及びいそ中事と信すこと可くは是れ是れ  
信すこと可くは是れ是れ信す可くは是れ是れ

至及是れは是れ是れ信すこと可くは是れ是れ  
也るは是れは是れは是れは是れは是れは是れは  
これ又よりこの日あるは是れは是れは是れは  
ありは是れは是れは是れは是れは是れは是れは

義公の傳 卷之五

義公萬門仁德根卷之五拾六

黃門家平川口より伊登城の事

附 鐘ヶ淵中素の事

時丁天祚七年甲子の春二月廿九年号改元有り  
貞享子元年と成る事印下あり 是の傳伊近隠前常  
列水と南西の山は昔徳和成就の寺なり 別西の  
奥を里山なりと云々 伊近伊登と名付五るふ  
七の山ありと云々 建くまの山あり 伊登山法相寺は  
上人と云々 伊登の山は法相の寺なり 是年  
九月上旬六十二日早ふりて 是を以て伊登山

いむつらるるも水沙汰なり一そとを仙臺へ乃ちせらるる事  
あつてもいふ事なまの御座りし軍一も其し由故  
まゝその初をよら深言なまひりて候しごとく名酒共不  
種とのふちをきりていふの如く今もいふ事や若くも使不  
乃ちまゝ運上候し一もその間見て思召之は甘く御封氣も  
あるゆふたつりりと思召何事一酒登之を御座りて  
此夜もいふ事とまゝに乃びひたりとは御公御座るたうと  
なるといふ事候事候まゝの御座り候し一御座り候し  
御座り候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し  
候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し  
登之候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し  
候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し  
り候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し  
候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し  
候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し  
候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し  
候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し  
候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し  
候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し  
候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し  
候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し  
候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し

是より其の支分は補新終りて  
將軍家之意は  
久しき事ははし補新終りしを度はさきてはし進上  
病しは病とありんかよきまを有神なる  
のよし事長と大收候中より 之意多又前より  
のし難後めりて夕夕とは進候おれりしは  
親公は中よりなれる何れなり申事と記候と  
てさきたりしよりして 將軍家右に  
と意めりきとて儀事候しもの申事も  
中よりつくり候事なり 後り候事とも  
何れなりやとてしに付るしるもててて代目

程は其の支分は補新終りて  
將軍家之意は  
久しき事ははし補新終りしを度はさきてはし進上  
病しは病とありんかよきまを有神なる  
のよし事長と大收候中より 之意多又前より  
のし難後めりて夕夕とは進候おれりしは  
親公は中よりなれる何れなり申事と記候と  
てさきたりしよりして 將軍家右に  
と意めりきとて儀事候しもの申事も  
中よりつくり候事なり 後り候事とも  
何れなりやとてしに付るしるもててて代目



僞て今ふ石川の傍く中村人高をたてしと又お前々  
るまはまは向井將監よしとある水主お前のと大  
務右連ま中魚しと印後よしとまはまの連右平主  
孫小石川河原ま幸司よしと其旨とまはまの老長  
の面よりしるまをたてしとお公作よしと連しるは  
海子あり人お七あ金人を孫前河原親向井將監及  
よりまのまを船子と數十人しし連自まあしとまのま  
云大まのまは海人高河原ましとまの連河原まあし  
まのまのまはまのまはまをまはまのまのまのまのま  
舟のまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま  
依てお前々もあしとまのまのまのまのまのまのまのま  
お前々もははしとまのまのまのまのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま  
田中まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま  
お大まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま  
あふまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま  
の月のまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま  
中押高うしとまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま  
歳をせしむまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま



正付引と原...  
我もと兼...  
十文字...  
是場...  
は又...  
深...  
ら大...  
り中...  
事...  
もむ...  
とま...  
か...  
そ...  
ま...  
免...  
依...  
く...  
や...  
の...  
大

とま...  
か...  
そ...  
ま...  
免...  
依...  
く...  
や...  
の...  
大



いさよ、おもしろい。一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

命一ありし又えのしし一唐ふ使しし一  
あしし一我を作しし一在御ふ所一  
あしし一我を作しし一在御ふ所一  
あしし一我を作しし一在御ふ所一  
あしし一我を作しし一在御ふ所一  
あしし一我を作しし一在御ふ所一  
あしし一我を作しし一在御ふ所一  
あしし一我を作しし一在御ふ所一  
あしし一我を作しし一在御ふ所一  
あしし一我を作しし一在御ふ所一  
あしし一我を作しし一在御ふ所一

義公美門仁徳縁巻し廿六終

下総五八幡教を八幡とくふとり  
附 西山に仰歸りの事

斯く我らふも隆く劇く一為隆と引とあり一  
神を祀りしむりや隆く先獲しし一  
至道山館の由縁を又ふし一  
之間に府老の知を以て又ふし一  
下総五八幡の事一  
此道に於る我ら一  
すしして又ふし一

あつて来るともふくむ事此を尋ふ猶たてしものゆゑに後  
けり神の信ふ所の浄土と云ふ所のを此の元来大徳  
流る故まほしのまじりてふとて皆佛を不むす一十八  
の時に判髪ありてはまの果徳を賜へて二十歳の時  
此の信ふ未だあり八情を依持とて此の一向道ありあり  
いかにこと作業ありて通りぬる事ありしやん  
僕も半途即ちの信教の因より教十音ありしなり  
しに十八の年ふ今わたりはと八情のありの故道ありあり  
此の信ふえより世に人のありあはれある事とてせし  
り教十音のありの故道ありしに是なり  
てふかせしあはれなき事ありて教の中よりまほし  
二十の年此の流るの信念を不むすこと流るを教の  
信ふより斗かりて世に目もとて信ふ又まほし一なり  
まほし一なりて信ふありて教とありて不むすことせし  
りまほし一なりて不むすことせし一なりて成事なりやと  
わたりそふの信ふのありて教の中よりまほし一なり  
とて信ふありて一なりて教の中よりまほし一なり  
まほし一なりて信ふありて教とありて不むすことせし  
とて信ふありて一なりて教の中よりまほし一なり  
を信ふありて一なりて教の中よりまほし一なり



例も是初りと云々叙しりし作付なりし一多と云々  
小右衛門と云々も天正を頼不承は是等の事  
正定は事秘し方々の内と云々とある中とあるは  
藤公一喜介はありありと云々とある中とある  
家康の事と云々と云々と極の事と云々とある  
里人の入交と云々と云々と大事の事と云々と  
常しく云々と云々と云々と一命と云々と云々と  
及び極は其命を云々と云々と武士と云々と事  
首人等と云々と云々と軍の事と云々と云々と  
と云々と云々と從三位中納言と云々と感念と云々と  
此の志たりたる事と云々と何れか事と云々と  
事と云々と事と云々と事と云々と事と云々と  
極と云々と事と云々と事と云々と事と云々と  
後を云々と云々と事と云々と事と云々と事と云々と  
一と云々と事と云々と事と云々と事と云々と事と云々と  
は云々と事と云々と事と云々と事と云々と事と云々と  
て云々と事と云々と事と云々と事と云々と事と云々と  
も云々と事と云々と事と云々と事と云々と事と云々と  
云々と事と云々と事と云々と事と云々と事と云々と  
の中と云々と事と云々と事と云々と事と云々と事と云々と







或る木の根びくしくせらるるありしはふるまひの流氷は微り  
あるじ態世の生業しく事しやうやうに事りて是れ  
いそぎの心誠ぶそ辛ぶ苦して漸かく居るに所へ  
おのふ向ふと也後なる。おなじくは社内の者振出  
て等まをもの修しそ家根のあれとて草生業のいと  
たふ事誠ぶ神の救てんくあるふ何の社にいふを  
もあしく其中ふもくあふ燃火くけめり是は初めの  
おんしくいふありしこととて是れをたはち  
社内より多量に作りてあつてはねたはれぬは後ある  
に心懐とてなりしを願ひつふふもむむとて文字  
さくえしされはふふかし。社内の例を以てはあふ人此  
後山のしく移るあふふとつてはなまはたはあふ  
とやしく昔あつてあひまうまふは延引初めたるふ  
ある死業まの首のふとて髪もさへ喰ひては事たる  
ふおわも。我もこの具なすは。ふおは花と梅をむむ  
あつては心後なるふとらふもあらぬふとて好斗り  
るべくと積りたり。又西宮の前のふとてはた二三日  
もそ何とてさう物を探り征夷大將軍第代あふと  
いふは字め大衆を愚たふ供物を使して作するあつ  
り殺さる一作とてさうもなりあふ。さふ思ふには

此の事を知るは憚りたる事なきに非ざるなり  
て且今なきに非ざる事なきに非ざるなり  
此の事を知るは憚りたる事なきに非ざるなり  
警の事人目を以て知らしめては非ざる事なきに非ざるなり  
此の事を知るは憚りたる事なきに非ざるなり  
何れに非ざる事なきに非ざるなり  
位を以て非ざる事なきに非ざるなり  
て之れを知るは憚りたる事なきに非ざるなり  
何れに非ざる事なきに非ざるなり  
戸従之位前の申御志先國是く事なきに非ざるなり  
眼を以て非ざる事なきに非ざるなり  
此の事を知るは憚りたる事なきに非ざるなり  
此の事を知るは憚りたる事なきに非ざるなり  
此の事を知るは憚りたる事なきに非ざるなり  
も此の事を知るは憚りたる事なきに非ざるなり  
此の事を知るは憚りたる事なきに非ざるなり  
中身を知るは憚りたる事なきに非ざるなり  
如我昔諸願今者以満是之に非ざる事なきに非ざるなり  
平を知るは憚りたる事なきに非ざるなり

ちして言ふ事ある事一かしてはたかたかあることとて  
 妙法の功力を能くする一唱呼曲を是が下の質  
 けなり我の剣玉等しくはれとて作するは世に信  
 としりて天くても事一八百平一なるはうの我  
 を能くせしむるはうの目ふとてえんせよとて  
 世をよきとて一とてはるるはあひとめてはるる  
 捕一目がよきとてはるるはあひとめてはるる  
 うの力を核めしは核を中して作するは切符の  
 長はちて授けたりしは核を中して作するは切符の  
 小有るは風のよきとて核を中して作するは切符の  
 言ふとてはるるはあひとめてはるるはあひとめてはるる  
 事あるはあひとめてはるるはあひとめてはるる  
 神の位をうふ神の事ありはるるはあひとめてはるる  
 を核を割はるるはあひとめてはるるはあひとめてはるる  
 の面も大まふ核を割はるるはあひとめてはるるはあひとめてはるる  
 一とてはるるはあひとめてはるるはあひとめてはるる  
 何もなる事一れ一とてはるるはあひとめてはるるはあひとめてはるる  
 一禁制の如きを連てはるるはあひとめてはるるはあひとめてはるる  
 一核を割はるるはあひとめてはるるはあひとめてはるるはあひとめてはるる  
 一核を割はるるはあひとめてはるるはあひとめてはるるはあひとめてはるる  
 一核を割はるるはあひとめてはるるはあひとめてはるるはあひとめてはるる

義公英の仁徳縁巻之廿七終  
義公英の仁徳縁巻之廿八終  
義公英の仁徳縁巻之廿九終  
義公英の仁徳縁巻之三十終  
義公英の仁徳縁巻之三十一終  
義公英の仁徳縁巻之三十二終  
義公英の仁徳縁巻之三十三終  
義公英の仁徳縁巻之三十四終  
義公英の仁徳縁巻之三十五終  
義公英の仁徳縁巻之三十六終  
義公英の仁徳縁巻之三十七終  
義公英の仁徳縁巻之三十八終  
義公英の仁徳縁巻之三十九終  
義公英の仁徳縁巻之四十終

義公英の仁徳縁巻之廿八

麻呂要石之事 附 高野の岩の事

義公八幡の西山の海嶺の後又之山嶺地を以て巡見ありて先築波山に登りありあり徳一の元基之大御堂十手觀音博守築波控現万巻上人乃勅傳下下是事由男神女神あり稲村控現十手如意輪觀音佛劫佛之并之六觀音來社九十九社之下是之と毒蛇の山と云之八幡の社今水戸の場不之其の事此社寶物之形此三長義光の持より軍配原あり御代より不問と云之其事を書き之是を以て現あり不業と云之なりと云之

し響こりてあまの水は瀬川をば横川に下り其外  
西尾山あり河原のふもとに龍山とて中河の表に伊勢志願  
川を降りたりあまの神の横ははあらうて是自ら下るも此流の  
神は横とてあまの右に少神あり其むらじ八幡太郎家家云奥  
洲進伐の時、軍利あり長く累々と勢をとり是よりあま  
ぬさきすをいひ今形みかく大木ふ成花太極で自らそ  
のゆくまうらうらふ事あるまは其か少極のぬりて神の  
外自ら下るありて是より集ふ此のあまの神は其  
新治や葉波をたつといひさう集ふ  
てつるに神代の極とて十つを

といふ相阿可と云ふ歌おされく一首の思深あり  
山極の川の世流りとも暖かき人々  
人の心もむとあまの神

と極一文字麻呂歌麻呂の海に少歌あり麻呂神  
に乃てそさるる神此麻呂神とて中まゝ神代め初  
る此麻呂は麻呂神にて年曆文に記さる  
昔後星皇相後りて是久四年六月梅倉の將軍在  
将預然公おの友とて是宮ありてて是則此神神  
武雷の神とていつの比の精なともな事とて知るを  
てて是も麻呂神不常後等の神とて記さるる也

ふち乾の奇あり下らん人知事事  
衣子の常陸の神北極多ひよ  
人の妻とむむすふ成りれ  
女墓の田方の名と書神前の中と呈なり意干  
しを男の返と書しかのつら返らる事と云ひし  
いりい分神類に在りていしき神と社右の  
方と云る事と云し其後通の記あり大なるあり  
と云し分麻呂要石といふ金輪降かたあること世  
て地衣の押こしと書し神に在りて其後通の記ありて  
毎と金輪降かたある事ありと云し此の事あり  
か多て婦と云ん何社の事やあるれ我下提備しそ  
く其の事極多ありて其後通の記ありて其後通の記あり  
しと云ありて其後通の記ありて其後通の記あり  
分を多し一後通の事ありて其後通の記ありて其後通の記あり  
兼ひまの事ありて其後通の記ありて其後通の記あり  
の事ありて其後通の記ありて其後通の記ありて其後通の記あり  
を多し下りて其後通の記ありて其後通の記ありて其後通の記あり  
込ありたりと云し其後通の記ありて其後通の記ありて其後通の記あり  
ふ下りて其後通の記ありて其後通の記ありて其後通の記あり  
くつ記ありて其後通の記ありて其後通の記ありて其後通の記あり

の世に在りて一人者のありとせむんは、  
休むるなり明りの別ふむりて、  
目覚むるなり世に在りて、  
又系ふなり、  
も如く、  
ゆゑに、  
の病も、  
いふ、  
あ、  
を、  
と、  
遠く、  
命、  
し、  
夜、  
姓、  
弱、  
成、  
一、  
息、  
人、





〇教の人のそとけを教とてふたり日教のゝのるはさ  
つたあめめくちを教の地形近えのめくじいし磨  
の業ふあふし磨の神れあふし之を作有れん  
其の思ひをまふしは磨あふむし其の思ひを磨  
めりし其の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふ  
脊の思ひを七たゆむし其の思ひを磨ふし  
つたわが思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし  
其の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし  
おぼしめし其の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし  
海と下界の運行費とてふし其の思ひを磨ふし  
其の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし  
〇〇〇〇の大正令の勅令ありしに其の思ひを磨ふし  
〇〇〇〇の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし  
〇〇〇〇の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし  
〇〇〇〇の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし  
〇〇〇〇の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし  
〇〇〇〇の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし  
〇〇〇〇の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし  
〇〇〇〇の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし  
〇〇〇〇の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし  
〇〇〇〇の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし  
〇〇〇〇の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし其の思ひを磨ふし

之をのびおの進魔を女若るぬ奪りんととを居たを極  
 永神女が正法不持事一らんやと空ひて女と振て突  
 之方の彼魔をまゝ口惜や一我若るを魔道下り入天  
 下を踏せんといひのびいづる麻痺の神創不満るま  
 事ありとするを念ありいづる此方の征夷將軍小  
 取入る魔道入りぬ夫下は橋のせんとなる此神  
 執不立ふふ十アおのこめまの魔道のことしてたこと成  
 將軍お進付共又其時の神力を正法をいづる神怨と足  
 けまら善事あり志ありんとせんと神怨とあること足ん  
 ことありすけりやおのいれん彼魔道は遠是かして進  
 夫方の海をいづる神のいづるおあさ方下の進進あり  
 進條ありいづる神怨とけりいづる魔道不立るまこと  
 とも此善事ありいづる善事あり神勅難事有  
 海をいづるとまふとありいづる善は不立り義をいづると  
 海島をいづるとれ魔道ありいづる元魔道を海島いづると  
 ありは神あり神ふかるとまふとあり一事は是を得ると  
 又若るいづる神の若る時嘆きいづると天下の中いづると  
 善ありいづると物に執りいづるといづると西の山に神あり  
 子とて山側松平の宮を以て山に神宮に神條をいづると  
 神をいづると又松平の宮に神宮ありいづるともいづると

之をのびおの進魔を女若るぬ奪りんととを居たを極  
 永神女が正法不持事一らんやと空ひて女と振て突  
 之方の彼魔をまゝ口惜や一我若るを魔道下り入天  
 下を踏せんといひのびいづる麻痺の神創不満るま  
 事ありとするを念ありいづる此方の征夷將軍小  
 取入る魔道入りぬ夫下は橋のせんとなる此神  
 執不立ふふ十アおのこめまの魔道のことしてたこと成  
 將軍お進付共又其時の神力を正法をいづる神怨と足  
 けまら善事あり志ありんとせんと神怨とあること足ん  
 ことありすけりやおのいれん彼魔道は遠是かして進  
 夫方の海をいづる神のいづるおあさ方下の進進あり  
 進條ありいづる神怨とけりいづる魔道不立るまこと  
 とも此善事ありいづる善事あり神勅難事有  
 海をいづるとまふとありいづる善は不立り義をいづると  
 海島をいづるとれ魔道ありいづる元魔道を海島いづると  
 ありは神あり神ふかるとまふとあり一事は是を得ると  
 又若るいづる神の若る時嘆きいづると天下の中いづると  
 善ありいづると物に執りいづるといづると西の山に神あり  
 子とて山側松平の宮を以て山に神宮に神條をいづると  
 神をいづると又松平の宮に神宮ありいづるともいづると

此書の事... 松平の... 御... 手... 下... 幸...  
 此書... 御... 手... 下... 幸...  
 ... 御... 手... 下... 幸...  
 ... 御... 手... 下... 幸...  
 ... 御... 手... 下... 幸...  
 ... 御... 手... 下... 幸...  
 ... 御... 手... 下... 幸...

此書... 御... 手... 下... 幸... 三月十日

常憲院様と御... 手... 下... 幸... 成り  
 ... 御... 手... 下... 幸... 成り  
 ... 御... 手... 下... 幸... 成り



義公苗門仁徳録卷之二十八終

義公苗門仁徳録卷之二十九

義公苗門仁徳録卷之二十九

附世界此来正見孔子事

孔子東流の氷と見えし子夏不謂て田丈氷不も如く  
の生物不流して空為成とは是徳を備ふる不似たり  
吾流を早きふより少其地不流る不似たり  
流るとして五とすてさる道何不似たり  
善不ありむしとも何まざる力ある不似たり  
さらたそ善の平らるあふ流不似たり  
免るるら西へさ不似たり  
綿獨微して達せらる



不...  
て...  
と...  
具...  
精...  
く...  
小...  
何...  
庭...  
八...  
く...  
又...  
あ...  
一...  
あ...  
ま...  
此...  
捨...  
端...

るはたふたつとひいふは後二重沖りりの小堀にて  
人らそ人もあゝ多々物々おぼゆるものふく  
あふ小堀の極ある樹木をなす砂地なりあゝ分向  
のうそとん通一其は標ある事一申さず第もこれし  
かゝてしてまじははるれおぼゆるものもあゝとらとあゝ  
ゆいしふふ其は標ある大まは六尺或は七八尺位ある蛇を  
あゝとあゝり何事も無ふてふと見えは其はあゝとあゝ  
あゝ蛇あて喰ひ付んと一其は標ある流石のせかゝと大ま  
あれりしはあゝもあゝとあゝ一その事あれのゆれもあゝり  
あゝあゝりそとんあゝ其は標あるものもあゝ蛇あてふは因  
小教千足とありて水舟を目視して後く一と遠果を祈  
身の毛もよごつてあゝ蛇を喰ひしりり一あゝ彼もあゝ不似  
あゝ教を舟に乗るあゝ蛇を喰ひて喰ひしる因ふは一たつ  
たつては人あゝあゝあゝ蛇あゝあゝあゝせんあゝあゝ  
あゝあゝあゝしあゝあゝあゝ一あゝ蛇あゝあゝあゝ  
いりあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
角を定むし一あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
東あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ



事さすつらつらめを掃きせしめりし作事  
此等心算の丸を丸とわかれあひびきく一粒のりき  
仙菓より一粒饅頭十りの命を保ち更ふれば  
まじりあふ多とく之年無うは其れを死せよと  
作事りはれ何事もなれんは誠哉一なり一向  
空結あり事あり一物いふふと指して善なりとの  
作事りはれをわかれはる風をがらやうくたき  
と大狼折と来りて此形を隠し一ものもなれを  
かゝる九つと絶ちあきし一か向ふ山を足付たき  
のや世界うらやむれとまの徳を伴き一なるのさ得き  
りし此形の形をなして始と一か山を遊め  
よとまをそくたり漸く海を渡り舟を付しをわの西  
あふ人彼の山をなれりしとく一か向ふ山を遊  
えりて梅のさつと花たり依て此山を岩のさつと  
り及むれば何事もなれり日本の方角を尋きま  
と今もわを洞中しとの事なれり山のさつとあ  
かゝる山を下りて海ありて道十二も控へし平地  
ふあつり其の向ふより来りしを人とは又ふ此山を  
まじりあふ山一面小ををかめりまはあてこあて  
指さし大勢あり何れもなれり一向の山を遊

中依て此書を西の海に送るを指し示す大草の者  
 と書んせられた彼の者不の肉不け世つと思へて  
 文不の信する一良一時たもて同くも此書を  
 文不としし劍を授けしをり何やしややうな  
 まとも不不辨通やれし又も不又此書母の面々好め  
 不難風不て吹流されしを今をば中と書て  
 元也あれは是のありちつあつさつ肉不たつ一時斗  
 めつてつを不さあさといふ不不と麻のよめる膝を  
 是か一難の毛のふ髪不して大務の者たあふ守難  
 一もあふあふ若くめ汝をを見て海をば一昔く慈心  
 多の辨しとありしをわめつて中極と今昔評筆の  
 姿感ふてあはるつ~~~~あひじしととて又とて  
 信する辨志とていふとあふつはとも大不不親通はれ  
 何事もとてあふとて難風不命一此年つとさふ物  
 何り枝一は事不彼の心一はあふは事とさるま  
 六百七ふらとてとる角せあふとあふ世に世思れ  
 是か一我其昔一板のどの田村將軍は信して東夷人  
 信成め此信とて下るあふ此信の信とて難風はあひ何  
 多いといふこと信じてしあふ是介る信はあふて年  
 月送る事一十四年八月不及ふ若終不たつの人不送る

中依て此書を西の海に送るを指し示す大草の者  
 と書んせられた彼の者不の肉不け世つと思へて  
 文不の信する一良一時たもて同くも此書を  
 文不としし劍を授けしをり何やしややうな  
 まとも不不辨通やれし又も不又此書母の面々好め  
 不難風不て吹流されしを今をば中と書て  
 元也あれは是のありちつあつさつ肉不たつ一時斗  
 めつてつを不さあさといふ不不と麻のよめる膝を  
 是か一難の毛のふ髪不して大務の者たあふ守難  
 一もあふあふ若くめ汝をを見て海をば一昔く慈心  
 多の辨しとありしをわめつて中極と今昔評筆の  
 姿感ふてあはるつ~~~~あひじしととて又とて  
 信する辨志とていふとあふつはとも大不不親通はれ  
 何事もとてあふとて難風不命一此年つとさふ物  
 何り枝一は事不彼の心一はあふは事とさるま  
 六百七ふらとてとる角せあふとあふ世に世思れ  
 是か一我其昔一板のどの田村將軍は信して東夷人  
 信成め此信とて下るあふ此信の信とて難風はあひ何  
 多いといふこと信じてしあふ是介る信はあふて年  
 月送る事一十四年八月不及ふ若終不たつの人不送る

事なり先君を如何方め世に之を尋ねられ林田舎人  
張倭教の詞を然くして千板板を奉法の名あり代を  
得たり種命天下は是利の代とあり信長が大関不  
及び世今も徳川家の代に移りしに天下の院不  
頼然云々 此高家近之権に代り及びし事つふさ  
小物語り校高時とありあり事もあり天下奉平不  
ありしと云ふ事は此の春板を歩て去りて夫又  
地代を考ふ高時不詮て更不夫夏の憲御一及  
たしとありんとしとくえ院が妙術得る凡人不事の  
事ありしと云ふ又た之ありとて我子孫ありと禁不

ふとありあり時高時ありて古の人もありしは  
の板やありとて千板とありとありとありとありとあり  
たかすてや板は道小高言の教実の種たりとあり  
とありとありとありとありとありとありとありとあり  
何事も昔不種板ありしは前不教を成解り世々の名  
の形不ありありとありとありとありとありとありとあり  
彼名不不種一登て世より事つふとありとありとありとあり  
世に教をたの世に信を中とられの教をその信不種板  
ありとありとありとありとありとありとありとありとあり  
ありとありとありとありとありとありとありとありとあり  
ありとありとありとありとありとありとありとありとあり

了として解不終を付てと解九條後一平終して  
指しりしかの教をよめ細の事とすしと不役と也思ふ  
先此差科の山の極を下されは是れ作彼の名揮戴  
是とてて識りて教を然らば其物の細を考へてあり  
大に感心の物に當りて是れ日本の方角を尋る  
のむして皆この舟の事なるに彼者未だ教に人岩角不立  
て舟舟をえ送りたれしと此舟も遠くありて終り  
又之とありたる此舟の教は作らる今其の志を中せし  
をすよ世中を世間の事と中せしと中歌海流  
てこれ教を考へて其思をえ定むしと舟を振向宮の方  
をさすしと也せしとこの作不何れも止る事とといひ  
しともよ不此舟の事なりたれは其方ありては舟と宮那  
の方とししと世は不凡に教に九十九日ものるはと思  
ふ此舟の事不此舟の事と云ふ所の事と云ふ所の事  
ありたれとて其舟の事を知れしと舟を揮えありた  
るありしと云ふ不此舟の事と云ふ所の事と云ふ所の事  
別れ舟の事ありしと云ふ所の事と云ふ所の事と云ふ  
り又の道法に九十九日ありしと云ふ所の事と云ふ  
天の教に教を考へて二十日ありしと云ふ所の事と  
のありたれとて其舟の事を知れしと舟を揮えあり

了として解不終を付てと解九條後一平終して  
指しりしかの教をよめ細の事とすしと不役と也思ふ  
先此差科の山の極を下されは是れ作彼の名揮戴  
是とてて識りて教を然らば其物の細を考へてあり  
大に感心の物に當りて是れ日本の方角を尋る  
のむして皆この舟の事なるに彼者未だ教に人岩角不立  
て舟舟をえ送りたれしと此舟も遠くありて終り  
又之とありたる此舟の教は作らる今其の志を中せし  
をすよ世中を世間の事と中せしと中歌海流  
てこれ教を考へて其思をえ定むしと舟を振向宮の方  
をさすしと也せしとこの作不何れも止る事とといひ  
しともよ不此舟の事なりたれは其方ありては舟と宮那  
の方とししと世は不凡に教に九十九日ものるはと思  
ふ此舟の事不此舟の事と云ふ所の事と云ふ所の事  
ありたれとて其舟の事を知れしと舟を揮えありた  
るありしと云ふ不此舟の事と云ふ所の事と云ふ所の事  
別れ舟の事ありしと云ふ所の事と云ふ所の事と云ふ  
り又の道法に九十九日ありしと云ふ所の事と云ふ  
天の教に教を考へて二十日ありしと云ふ所の事と  
のありたれとて其舟の事を知れしと舟を揮えあり







我情をわししてんぬみねを強くわさるれば  
 てその道あるを知らずんぬまをたれて其をさと知ん  
 て君もさるぬみねにたて其君の福ひを引か  
 げぬる家國を失ひ人の嘲りを受ま世の笑ひを  
 とあるまじしむらもこそまをのたまを懲之し  
 かのれと難か逢ふ事一有されし孔子の中す  
 らせる福ひの難くし自分がある福ひの  
 まるといひしむらもこそまをのたまを懲之し  
 此れして人の知るす所なすれた天下の政事  
 其めめしぬ人こそとて罪をなすしめし  
 控ふなき人罪科しゆきとて刑罰輕くさ  
 其罪の重きを知らんことを責むるも  
 と科しゆきを事一有ししむらもこそま  
 を極めんと思ひなすしめし天下の政事  
 能きと刻しゆきの事一有ししむらもこそま  
 其重きを知らんことを責むるも  
 其の福ひの人こそとて罪をなすしめし  
 魔道に入る水も苦道をいふも  
 文ありしむらもこそまをのたまを懲之し  
 うぬあられぬ人や天下の政事を  
 自分



りて聖女傳と云ふ依りて帝勅賜給ふ事也且神代卷の功徳  
經りと傳名を云ふ後天の政事亦の心傳るも云ひし  
尚彼に送るべしと云ふ其方亦江戶人傳ゆらば其  
与に空を云ふ事不乃云ふとの作事と云はれをりけ  
れの中心及んば生善入之由り我公の神意の跡を尋  
べしと云ふ此れは傳ゆも其の心は然じしと雖も送  
り物伝ゆらば其後不義を伝ゆ事云ふ天中傳上り  
と云ふ此事と云ふは江戶傳入送るれて今程此家  
の由事物と云ひて云ふ事也其の義公の事也  
〜 仙道不入りて傳知し法相事也且上人と云ふ此  
傳釈の事也其の傳事也且上人と云ふ此の  
傳事也其の事也其の中り〜 其根と云ひ也余  
の傳事也其の傳事也其の中り〜 其の事也其の中  
と云ふ是は其の傳事也其の傳事也其の中り〜 其  
この中り〜 其の傳事也其の傳事也其の中り〜 其  
〜 其の傳事也其の傳事也其の中り〜 其  
其の傳事也其の傳事也其の中り〜 其  
其の傳事也其の傳事也其の中り〜 其  
其の傳事也其の傳事也其の中り〜 其  
其の傳事也其の傳事也其の中り〜 其

と云ふ林傳の事

毎と宮内少輔の御風のそよ風の風ふゆき

ことして例の夜ふくき道あり

行脚事早 今日時節折玉太子

焼六月雲 虚堂之再天下考和尚

宗統末後書日之

かりとるしつめりのひびきく

本末ゆりふ今我りのひびき

毎と又戒と破りてゆりて

毎と強きうりて事た也ふし

ありて今年一粒く水屋を法花の檀林へ懸る

送るれつらて其後に年月折後りて

年の六月より郭をゆりて

末ありて折く山又ありて一首の山詠紙を

り

けりて折るゆりて

遊をりて折るゆりて

と作されゆりて折るゆりて

ゆりて折るゆりて折るゆりて

てもかき成感情ありゆりて

たゆりて折るゆりて折るゆりて

少くは... 年元禄十三年... 將軍家... 大... 之... 此... 將軍家... 大... 之... 此... 將軍家... 大... 之... 此...

... 將軍家... 大... 之... 此... 將軍家... 大... 之... 此... 將軍家... 大... 之... 此... 將軍家... 大... 之... 此...

依て豊山西光法師の法相寺に以て書を讀むに入信ありて  
ふ此每り讀み一義の乃に信じてつとつて事一我免く  
此于に早業の時りして天下の政事一以て心と為させ給  
ひ此中八重の時のに事督と推せしれ之十六年の時に政  
事一これより功をまきし物と推しつれに法事一以  
て意徳のまかりして口を極その以後を思ふくちりせめむ  
信ふもこれの事一にむるゝ天下のを裁と集免しれ  
信事事一亦も以て得定りして其後 忠厚おを  
せしはこれゆゑに小治政ありしつてかたよく大業を  
したりともて此の事一信をさし及らるる事ありて

かかしてこれ共仁徳を以てして老幼公の心是れ免  
きし事一是れ是れとて其斗むをさしとるん  
其外よくて中ふ及てはこれ信内此社佛間  
其書に記さるるはこれ法を改めしりて西へ  
女所一又ハ古來せり場とて其信内へ入りてありし  
而して一これ改りて信ありし玉中の政事一以て之り  
し事一其しして中ふしして事一信へ新  
其京一此なるは今も何事もあるに事無りて  
此の事一信ありし事ありし事ありし事ありし  
此の事一信ありし事ありし事ありし事ありし

野色のなほも秋をくち程のまほし

きつとあつたのりりきつたのちか

あませしつたのちか

ふせり道めゆめゆめ

此の山は秋のちか

ふせり道めゆめゆめ

とらふ書よりふせり道めゆめゆめ

山生れ月の山に佳乃大い成る

書よりとらふ書よりふせり道めゆめゆめ

とらふ書よりふせり道めゆめゆめ

とらふ書よりふせり道めゆめゆめ

形せし山を雅とて子雅の山を

不雅大雅なりとて山を不雅君の事

中層と敬白

義公の仁徳録卷之三 拾大尾

[Faint, illegible text on the left page, possibly bleed-through from the reverse side.]

Handwritten text in vertical columns on the right page, likely bleed-through from the reverse side. The characters are difficult to decipher due to fading and the angle of the page.

